

「ハンセン病と社会」をめぐる実地研究の展開と 実践教育の展望

成原 有貴

《要旨》

本研究は、「キリスト教学実践 A ハンセン病と社会」の授業プログラムのあり方と教授方法について考察したものである。プロジェクトメンバーによる草津での研修および意見交換、外部講師講演を通して、授業プログラムや教授方法を探究し、授業内容の充実と発展を目指した。筆者は、2016年・2017年度は引率者として、2018年度は科目担当者として授業を行った。2016年度の学生の学びを観察したところ、差別や偏見の問題について掘り下げて考察する力を養うことが課題であることがわかった。この課題に応じた新たなプログラムを設定するべく、事前学習の内容と形式、湯之沢地区と栗生楽泉園見学へのガイド導入、振り返り学習の位置づけなどを検討した。新プログラムを2017年度・2018年度の授業に反映させたところ、学生の学びに顕著な変化が見られた。特に2018年度の学生のレポートは、社会における差別や排除の問題を自分自身に関わるものとして受けとめ、問題とどのように向き合っていくかが、具体的に考察された内容となった。

キーワード：ハンセン病問題 共生教育 多様性教育 ハンセン病とキリスト教

1. 研究の目的

本研究は、群馬県吾妻郡草津町を中心としたハンセン病史の学びと実践教育について考察したものである。「キリスト教学実践 A ハンセン病と社会」の授業プログラムのあり方と教授方法について、調査研究、プロジェクトメンバーによる草津での研修および意見交換、外部招聘講師講演を通して探究し、授業内容の充実と発展を目指した。

2. 「キリスト教学実践 A」授業概要

「キリスト教学実践 A」は、ハンセン病問題の歴史を実践的に学び、人びとが共に生きるとはどのようなことか、共生社会の実現に向けた課題とは何かを考えることを目標に

している。

筆者は、2016年度・2017年度は同授業を引率し、2018年度には科目担当者となった。2018年度は、文末資料(「年度別授業プログラム 2016年度～2018年度」)に掲げたように、学内で事前学習を実施するとともに、草津町における2泊3日の研修を引率した。

＜授業プログラムと履修者数＞

プログラムは、学内での座学と学外研修を組み合わせたものとなっている。履修者の募集は、現代教養学科日本専攻・人間社会専攻・国際専攻、子ども学科の全学年を対象として行い、2016年度から2018年度までについていえば毎年度7名程の学生が履修している。学科・専攻による履修者数の偏りは特に見られない。

＜授業履修の動機＞

各年度、履修確定後の説明会において、履修動機を学生にたずねている。学生からの主な回答は次のとおりである。

- ・他の授業でハンセン病問題をめぐる負の歴史について学び、受けとめなくてはいけないと思ったから。
- ・他の授業でハンセン病問題のドキュメンタリー映画を見た時、自分が関わったわけでもないのに、なぜか罪悪感を抱いたから。
- ・他の授業の研修で沖縄愛楽園に行き、草津のことを聞いたから。
- ・ハンセン病訴訟のニュースを見て、関心をもったから。
- ・自身がキリスト者だから。

以上のなかで最も多かった回答は、本学での他の授業においてハンセン病問題の歴史を学んだというものである。このように、学びの相乗によって、問題意識を掘り下げ、考察を深めていくことができるのが、本学のカリキュラムの特徴であると改めて実感した。一方、履修学生の大半は、大学入学以前、高校までの座学や学外研修等では、ハンセン病問題について学ぶ機会はなかったという。社会問題としてハンセン病に対する関心が薄れてきていることが実感された。

3. 問題の所在

2016年に初めて引率として参加し、履修学生の研修時の学びからレポートまでを通して観察したところ、ある傾向に気づくこととなった。それは、多くの学生がレポートの結論に、差別に対する義憤ともいえるような内容を記していたことである。以下、いくつかの例を要約して掲げる。

- ・「教科書に載っている過去にせず、しっかり伝えていきたい」
- ・「同じ過ちを繰り返さないことが大事だ。そのために、私たちが個人として知識を蓄えるところにとどまらず、それを他者に対して発信していく必要がある。」
- ・「自分が学んだことを人に伝え、理解を広めたい。ただ受け身でいるのではなく、自分自身が動き、多くの知識と勇気を持たなければならないと思う。」

たしかに、学びをよく活かし、見聞し体験したことを自分の内だけにとどめず、差別や偏見の問題について伝えることの大切さを実感した様子がよく窺える。だが、伝える際に自分がどのような視点から伝えるのか、つまり、差別や排除の問題に対して自分がどのような立場から語るのか、その問題について語る「私」の立場とは一体どのようなものか、ということは、それほど強く意識されていないように見受けられる。

現代社会において、「多様性社会」の実現が求められて久しいが、現実には、同調化圧力や無知・無関心などによって、差別や排除が広がり、また深刻化している。近年の特に若年層を取り巻く状況の中には、貧困や虐待、いじめ、エスニック・マイノリティの問題やLGBTとして生きる困難さなどがあり、学生たち自身が人権に関わる切迫した問題にさらされることも少なくない。こうした現状にあって、共生社会の一員として、また、担い手として生きることができるようになるためには、自分自身が差別や偏見とどのように向き合うかを考えることが重要である。差別の問題を「他人事」として傍観するのではなく、第三者的立場から糾弾だけを行うのでもない、別のあり方が求められるのである。社会のなかで他者とともに生きるためには、差別や排除の問題を自分がどのように捉え、その問題に対していかに働きかけるかを問う思考力や想像力が欠かせない。これは、多様性教育、人権教育が目指すところである。

そこで、2017年度授業では「共生の問題を自分自身にかかわる問題として考えること」を到達目標として強化することとし、これに相応しい授業プログラムを考案するべく、調査研究、プロジェクトメンバー参加による草津研修、外部講師招聘による講演を実施した。それぞれの概要を掲げる。

4. 本プロジェクトにおける草津研修・外部講師講演概要

(1) 草津研修（国立療養所栗生楽泉園、旧湯之沢地区および関連施設での研修）

2017年6月30日～7月2日実施。研修内容は以下の通りである。

○大正・昭和期にハンセン病救済事業を展開したイギリス人女性宣教師メアリ・ヘレナ・コンウォール・リー女史の記念館見学。

○リー女史が活動した旧湯之沢地区見学

内嶋貞夫氏（リーかあさま記念館 ボランティアガイド）による案内で見学。

旧湯之沢地区見学は、これまで「キリスト教学実践 A」授業でも実施してきたが、今回の研修においてガイド付見学を初めて導入した。地域に長く暮らしてこられた方ならではの視点から、御自身の体験を交えつつ町の歴史が語られた。また、地域の方々とコンウォール・リー女史の結びつきを知ることができた。

○国立療養所栗生楽泉園での研修

楽泉園内を、小澤覚氏（国立療養所栗生楽泉園・国立重監房資料館 ボランティアガイド）による案内で見学。楽泉園見学はこれまでの授業でも実施してきたが、今回は、園内における見学の範囲を広げ、ガイド付見学を初めて導入した。楽泉園内の上地区・下地区を散策路に沿って見学した。建物や跡地をめぐり、楽泉園の歴史と入所者の方々の暮らしについて、詳しく説明を受けることができた。

○重監房資料館

北原誠氏（重監房資料館 主任学芸員）による展示解説

(2) 外部講師講演

群馬大学では、授業としてハンセン病問題のフィールドワークを行っている¹⁾。また、地域貢献事業として、栗生楽泉園ボランティアガイド養成講座とスタディバスツアー（貸切バスで一般の方を楽泉園に連れて行き案内するツアー）を行っている。さらに、『ガイドブック 草津・栗生楽泉園 ハンセン病 共生と隔離の歴史を学ぶ』（群馬大学社会情報学部刊行、2017年3月）と笹雄二さんをテーマとしたドキュメンタリー映像「いのちの証を求めて」を制作した。こうした多くの実践から学ぶため、授業と事業を担当してこられた社会情報学部の西村淑子先生をお招きし、講演して頂いた。日程と講演題は次のとおりである。

講演実施日：2017年12月4日（月）18:00～20:00

講演 題：「群馬大学社会情報学部におけるハンセン病問題に関する実践教育及び地域貢献事業について」

講演 者：群馬大学 社会情報学部 西村淑子教授

講演内容と質疑応答は、『青山学院女子短期大学 総合文化研究所研究プロジェクト「共生社会に向けた実践教育の研究」プロジェクトの記録2017－2018』（青山学院女子短期大学総合文化研究所研究プロジェクト「共生社会に向けた実践教育の研究」編・刊）p16～28に掲載。

講演における西村先生と本学参加教員との質疑応答の中では特に、学生が学びを行った後の事後学習の重要性がテーマとして話し合われた。学生が現地を訪れて当事者の方々と対話をしたとしても、そこで話されたことや聞いたことがすべてではなく、すぐには見えないことや分からないこともあるのであり、そのことに対する気づきもまた学びの一環であることが改めて認識された。

群馬大学における楽泉園研修を含めた授業プログラムでは、事後にレポートに基づいた報告会が組み込まれ、学生のレポートの一部は楽泉園機関誌『高原』に掲載される。そのため、課題レポートの添削指導がきめ細かになされている。添削の段階で、西村教授から学生に対し、考察を深めるべき点などを含めた指導がなされることで、学生が自身の学びを捉え直す機会が生まれていることがわかった。

本学の授業プログラムでは研修後の学習は特に設定されていないが、草津研修最終日の振り返り学習（ディスカッション）がそれにあたる。振り返りにおいて、学生が研修で得たことをまとめ、それを客観的に省察する視点が得られるよう、内容の充実に向けた工夫が必要であることがわかった。

5. プログラムの検討と実施の成果

以上のような研修・研究の機会を得て、プログラムを検討し、2017年度・2018年度においてそれぞれ、新たなプログラムを実施するに至った。以下に、2016年度からの主な変更点を、事前学習、見学ガイド、振り返り学習の位置づけ、学生レポートの内容の変化、の順に記す。2016～2018の各年度のプログラムは、文末に掲載した資料を参照されたい。

(1) 事前学習

2016年度は、草津でハンセン病救護活動を展開したコンウォール・リー女史に関する講演であったが、座学で知得し得る予備知識として、ハンセン病問題の歴史について学生に理解させる内容に変更した。2018年度についていえば、『ガイドブック 草津・栗生楽泉園 ハンセン病 共生と隔離の歴史を学ぶ』（群馬大学社会情報学部制作・発行、2017年）を配布し²⁾、ガイドブック掲載の年表と照らし合わせつつ、1907年（明治40）年「癩予防ニ関スル件」法律第11号公布から1996年（平成8年）「らい予防法」廃止に至るまでの歴史を、パワーポイントによるレクチャーによって概観した。また、大正期に草津でハンセン病救護事業を展開した女性宣教師コンウォール・リー女史の歩みについて、その様相が実感的に伝わるよう、当時の写真をスライドで提示しながら説明した。

さらに、授業での学びを、履修者が差別をめぐる自身の意識を問い、検証する契機にするべく、教員から次のような問いかけを行った。「自分の身近な環境にも差別があるのではないか、考えてみよう」、「自分が同じ状況に置かれたらどのように思うか、行動するかを考えてみよう」、「自分の中に差別感情があるだろうか。もしあればどのような対象、状

況に対してだろうか、それは何故だろうか」。このような問いかけに対する応答を自分なりに考え、9月の授業に臨んでほしい旨、学生に伝えた。受け身で知識を得るために参加するのではなく、自らが考え、積極的に参加する意識を喚起するよう努めた。草津という場がハンセン病の歴史とどのように関わっているかを理解し、さらに、学生たちをとりまく身近な問題へと考察を広げることを目指した。

(2) 見学ガイド

○旧湯之沢地区

楽泉園がなぜ草津という場所にあるのか、その背景を理解し、草津という土地の歴史をハンセン病問題の歴史と結び付けながら捉えるためには、学生が自らその場所を訪れるとともに、実際の場所で話を聞くことが最も有効である。これは、2017年実施のプロジェクトメンバーによる草津研修の際に、ガイド付きの湯之沢地区見学を実施して得られた実感である。2017年度のガイドは地域に長く暮らしておられる内嶋貞夫氏にお話をお願いした。2018年度のガイドは、楽泉園のボランティアガイドとして活動されている小澤覚氏にお話し、ハンセン病問題に特化した視点から地区の歴史を説明して頂いた。小澤氏は、オリジナルのテキストを提供して下さるとともに、教員が授業としてどのような内容の説明を求めているかを、事前の打合せの中で聞き取って下さった。小澤氏からの問いかけは、筆者が引率者・科目担当者として学生に伝えるべきことを再考する貴重な機会となった。

○楽泉園見学

楽泉園の歴史と入所者の方々の暮らしについてより詳しく学ぶため、園内見学の箇所を大幅に増加させることとした。2016年度の見学範囲は上地区の一部であったが、2017年度と2018年度は、上地区と下地区の見学可能な区域のほぼ全てに拡大した（見学範囲は、文末資料2018年度プログラムに掲載）。見学範囲拡大に伴い、各所の由来やそこでの暮らしについての説明を伴ったガイド付きの学習を組み入れることとした。ガイドは、2017年度は小澤覚氏（国立療養所栗生楽泉園ボランティアガイド）に、2018年度は小林綾氏（栗生楽泉園）に、それぞれお願いした。2017年度と2018年度でガイドを変えてお願いした理由は、楽泉園の外部と内部という立場の異なる方をお願いすることで、それぞれの立場からの語りに接する機会を得るためであった。

(3) 振り返り学習の位置づけ

これまでは参加者が研修の感想を述べ、参加者どうしが学びを共有するという形式であった。このことに加えて、2018年度は、振り返り学習をミニ発表とディスカッションとし、参加者が学んだことを積極的に言葉にし、自身の学びを客観的に捉え直す機会にすることを目指した。この目標を学生に事前に伝え、到達すべき点を明確にした。学生にはま

た、振り返り学習で自分以外の履修者の発表を聞いて得られたことを、レポートに盛り込むよう指導した。見学で見聞したことをただまとめるのではなく、レポートの内容に、自分自身にとってどのような学びであったのかを考察するとともに、ハンセン病をめぐる差別を自分自身の環境にひきつけて、自分自身の中の差別意識を検証するという内容を盛り込むことを指示した。以下、ディスカッションでの学生のコメントを要約して掲げる。

○患者は病者どころか人として扱われていなかった。

○療養所によって、雰囲気や入所者の方々が環境に対して抱く思いが異なると感じられた。

○差別の深刻さに衝撃を受けた。病気の苦しみに加えて差別にさらされる苦しみがあった。どんなにつらいことだったのかと思った。

学生のコメントに対して、筆者から、差別、偏見は終わったわけではない、たとえば熊本での宿泊拒否事件はつい最近である。差別と排除の問題が顕在化する一方で、潜在化した差別感情もあるのではないか、との問いかけをおこなった。すると、このやり取りを聞いていた別の学生から、次のようなコメントが発せられた。

○法律が廃止されても、偏見や誤解をなくすことはとても難しいのだと痛感した。

ここで、筆者は「このような状態の克服に向けてどのようなことが可能だろうか？」との問いかけをし、同じ学生が次のように応答した。

○難しい…。苦しみや痛みを自分にかにかえられるか、自分のなかに想像力を育てることが大事ではないか。

このやり取りを聞いて、学生たちの次のようなコメントが続いた。

○研修のなかで、回復者の方々や支援をする方々に実際に会い、お話をしてきた。こういう経験を通して、自分の感情が変化した。遠くからの「同情」から、感情を共有するというような、うまくいえないが、個人のリアリティを伴った思いが変わった。

○差別は、見た目、自分とは異なる存在を、無意識のうちに自分を脅かすものとしてみるところからくるのではないか。

○差別して良いと思ったら、人権など考えずにエスカレートする怖さを実感した。

(4) 学生レポートの内容の変化

振り返り学習を重視した2018年度には、研修後のレポートに明らかな変化が認められた。以下に掲げたレポートの抜粋が示しているように、自分のなかにも偏見があることへの気づきや、偏見とどのように向き合うのかという自分自身への問いかけ、過去の問題ではなく現在にもつながる問題であること、などが新たに記されるようになった。

- ・ガイドの方のお話を聞きながら歩くなかで、一番衝撃を受けたことは、昔、「投げ捨ての谷」といわれたところで、重病患者を谷に葬ったという話を聞いたことだった。歩いている途中で「かつて、このあたりに葬られたのです。」という話を聞いたとき、今まで自分の中にあった、「明るくて楽しい」という草津のイメージが、ただそれだけではないものになった。
- ・マイノリティに「抵抗感」を持ち、彼らに対して「優越感」を得たいという気持ちがあるが、誰にでもあり得るのではないかと。私たちが「抵抗感」と「優越感」を打破し、社会的マイノリティの境遇について私たちが正しい知識を得て、受け入れていかなければ、差別は終わらない。私たちの側の思い込みを変えていかなければ何も変わらないと考えた。
- ・差別や人権侵害は現実の日々の生活の中で行われている。この現実を学び、自分の考え方や自分の内にある差別意識を克服していくことが、この状況を変えることにつながるのではないかなと思う。
- ・もちろん、ハンセン病問題を正しく知ることは大事だ。しかし、問題は「無知であった」ということだけなのだろうか。偏見は誤解とは違う。いくら正しい知識を得たとしても、差別がすべてなくなるとは限らない。大事なものは、当事者たちが味わった痛みや苦しみをどこまで自分の身に置き換えられるかではないだろうか。
- ・差別や偏見を払拭するために「正しい知識」は必要だ。けれども、それだけで人権問題が「解決」しないこと、差別や偏見が「解消」しないことも事実である。最もやっかいなのは「感情」ではないか。「知識」と「感情」のギャップを克服するためには、自分の生き方や考えを多くの人との交流の中で問い直すことが有効なのではないか。「歴史的事実」を学び、自分自身の内にある差別意識を克服していかうとするなかで、この「感情」を変えることができるのではないかと。

以上がレポートの抜粋である。差別の問題に向き合うとは、差別されてきた側の歴史や差別されている側の現状を知るだけではなく、差別をしてきた側のありようにも目を向けることである。そして、差別や偏見がどのようにして起こるのかを検証的に考え、共生社会の一員として生きるために自分にはどのようなことが可能かを模索し続けていくことが求められる。今回の学生たちのレポートからは、こうした歩みの一歩を踏み出した様子がうかがえる。

今後、考察をさらに展開させるためには、レポート提出後に履修者全員の参加による学内での報告会を組み入れるなど、深化した学びを共有する機会を設けることが必要であると思われる。報告会を、口頭発表やディスカッションで構成するならば、こうしたパフォーマンス課題を評価するに相応しい、新たな評価基準の設定が求められよう。具体的に述べるならば、前年度までに学生から提出されたレポートなどを参照してループリックを作成し、これに基づいた評価がなされることが望ましいと考える。作成されたループリックが学習にあたって学生にも共有されるならば、学生にとっては学習目標が明確となり、一層の学習効果が期待できるであろう。

6. シンポジウムの成果

2019年1月12日には、本プロジェクト全体にわたるシンポジウム「被災地に学ぶ」（第一部研究報告「共生社会に向けた実践教育の研究」）が開催された。本プロジェクト研究担者の報告のあと、ディスカッションと質疑応答があった。その中では、遠隔地での学習のメリットとデメリット、また、遠隔地での授業における非日常性の体験を授業後の日常性にどのようにつなげていくか、という質問が寄せられた。頂いた質問に対し、筆者が授業担当者として応答したことを記し、稿を閉じることにしたい。

筆者が授業で学生に折に触れて伝えていることは、学校や自身が居住する地域と離れた場で見聞き体験したことは確かに重要ではあるが、そこで見えなかったことや気付かなかったことに後から思いを巡らすこともまた、同じように大切だということである。非日常の体験つまり現地で見聞いたことだけで分かった（学びが終わった）と思うのではなく、現地から帰った後も、現地の研修で見えなかった部分は何か、気付かなかった部分は何かということについて、想像力を駆使して省察するのである。そして、同様の省察を日常の領域に対しても行い、自己と他者をめぐる問題に気付こうとし、その問題に働きかけていくことに繋がるのではないかと考える。

- 1) 西村教授によれば、群馬大学は、2016年から新カリキュラムとしてディレクション制をとっており、2年次に「公務と法律」「メディアと文化」「経済・経営」の三つのディレクションの中からいずれかを選択し、そのディレクション所属の科目を必ず履修することになっている。ハンセン病問題のフィールドワークは「公務と法律」に属する科目である。
- 2) このほかにテキストとして配布し、講読することを課題とした文献は、『リーかあさまのはなし ハンセン病の人たちと生きた草津のコンウォール・リー』（中村茂・文、小林豊・絵、斎藤千代・構成、ポプラ社、2013年）、小澤覚「草津温泉とハンセン病の関わり」（青山学院女子短期大学ガイド資料、2018年9月6日）である。

【参考文献】

- 荒井英子『ハンセン病とキリスト教』岩波書店、1996年。
- 筈雄二『わすれられた命の詩—ハンセン病を生きて』ポプラ社、1997年。
- 筈雄二『知らなかったあなたへ—ハンセン病訴訟までの長い旅』ポプラ社、2001年。
- 大阪多様性教育ネットワーク・森実編著『多様性教育入門—参加型人権教育の展開』解放出版社、2005年。
- 伊波敏男『ハンセン病を生きて—きみたちに伝えたいこと』岩波書店、2007年。
- 中村茂『草津「喜びの谷」の物語 コンウォール・リーとハンセン病』教文館、2007年。
- 小笠原真「ハンナ・リデルとコンウォール・リー—近代日本におけるキリスト者の「救済」事業—」『愛知学院大学文学部紀要』39、2009年。
- 筈雄二・黒坂愛衣・福島安則編『栗生楽泉園入所者証言集』上・中・下、栗生楽泉園入所者自治会、2009年。
- 大阪多様性教育ネットワーク・森実編著『多様性の学級づくり—人権教育アクティビティ集』解放出版社、2014年。
- 中村茂監修・菊地邦杏編『コンウォール・リー女史の生涯と偉業 注釈付復刻版』日本聖公会北関東地区聖バルナバミッションとリー女史記念事業推進委員会、2016年。
- 有蘭真代『ハンセン病療養所を生きる 隔離壁を砦に』世界思想社、2017年。
- 田中等『ハンセン病の社会史』彩流社、2017年。
- ハンセン病家族訴訟弁護団『家族がハンセン病だった』六花出版、2018年。

【資料：年度別授業プログラム 2016年度～2018年度】

<2016年度>

①学内での事前学習

中村茂氏（『草津「喜びの谷」の物語 コンウォール・リーとハンセン病』著者）によるレクチャー

②学外での研修

(1) 群馬県吾妻郡草津町における研修（2泊3日）

- リーかあさま記念館（コンウォール・リー女史の記念館）見学
- 旧湯之沢地区見学
- 重監房資料館見学

柏木亨介氏（重監房資料館 学芸員）による解説

- 国立療養所栗生楽泉園 回復者の方の講演聴講

○国立療養所栗生楽泉園内見学 社会交流会館、納骨堂、供養碑、つつじ公園など上地区の一部。

(2) 現地での振り返り学習

研修を通しての学びをふり返り、それぞれの感想を述べる。

<2017年度>

①学内での事前学習

②学外での研修

(1) 国立ハンセン病資料館（東京都東村山市青葉町）見学、資料館において回復者の方の講演を聴講。

(2) 群馬県吾妻郡草津町における研修（2泊3日）

○リーかあさま記念館（コンウォール・リー女史の記念館）見学

松浦信牧師（草津聖バルナバ教会）による解説

○旧湯之沢地区見学。ガイドは内嶋貞夫氏（リーかあさま記念館 ボランティアガイド）

○重監房資料館見学

香川進司氏（重監房資料館 総務主任）による解説

○国立療養所栗生楽泉園 回復者の方の講演聴講

○国立療養所栗生楽泉園内見学

ガイド：小澤覚氏（国立療養所栗生楽泉園・国立重監房資料館 ボランティアガイド）

(3) 現地での振り返り学習

研修を通しての学びを振り返り、意見交換を行う。

<2018年度>

①学内での事前学習

レクチャー（成原）「ハンセン病と社会—何が問題なのか」（パワーポイントで歴史を概観する。自分たちの周囲にある差別や偏見について考える）。

②学外での研修

(1) 国立ハンセン病資料館（東京都東村山市青葉町）展示見学、資料館において回復者の方の講演を聴講（※台風により中止）。

(2) 群馬県吾妻郡草津町における研修（2泊3日）

○リーかあさま記念館（コンウォール・リー女史の記念館）[図1] 見学

松浦信牧師（草津聖バルナバ教会）による解説

○旧湯之沢地区見学

各年度のガイドを担当して下さった方

2017年度 内嶋貞夫氏（リーかあさま記念館 ボランティアガイド）

2018年度 小澤覚氏（国立療養所栗生楽泉園・国立重監房資料館 ボランティアガイド）
[図2・3]

○重監房資料館見学（解説付）[図4～7]

○国立療養所栗生楽泉園 回復者の方の講演聴講

○国立療養所栗生楽泉園内見学（上地区、下地区を散策路にそって見学。上地区は重監房跡地、小林公園、栗生神社、カトリック教会、下地区は旧望小学校、バルナバ公園、聖慰主教会、青年会館、大師堂などを、ガイド付きで見学）

各年度のガイドを担当して下さった方

2017年度 小澤覚氏（国立療養所栗生楽泉園・国立重監房資料館 ボランティアガイド）

2018年度 小林綾氏（国立療養所栗生楽泉園）

(3) 現地での振り返り学習（ミニ発表、ディスカッション、レポート作成指導）

参加者全員で教員も加わり、研修を通しての学びをふり返る。一人一人が体験を言葉にすることで、自分自身の考えを整理するとともに、他者の意見を受けとめ、レポート作成に展開させる。



図1：草津聖バルナバ教会（向かって左側が「リーかあさま記念館」）



図2：湯畑で小澤寛さん（国立療養所栗生楽泉園・国立重監房資料館ボランティアガイド）から説明を聞く。
この後、旧湯之沢地区へ向かう



図3：旧湯之沢地区見学
小澤さんの説明を受け、当時の様子を思い浮かべる。

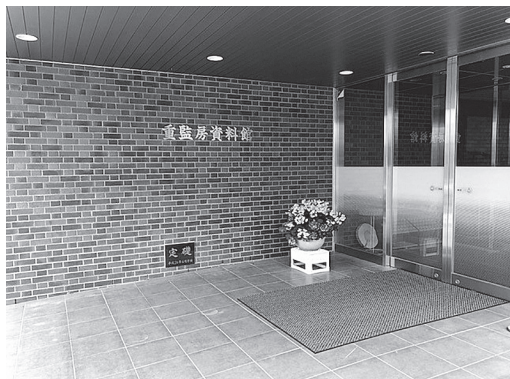


図4：重監房資料館



図5：重監房資料館 復元された重監房の建物の一部



図6：重監房資料館 復元された重監房の建物の中に入る（許可を得ての写真撮影）



図7：重監房資料館展示室
重監房資料館職員の方の説明を聞く。

Consideration and Prospects of Educational Practice on “Hansen’s Disease and Society”

Yuki NARIHARA

The purpose of this study was to investigate and teaching approach and methods for “Hansen’s Disease and Society” through study and discussion in Kusatsu (Gumma prefecture) by project members, and lectures by invited lecturers, aiming at the enhancement and development of the lesson content. I taught as a leader in 2016 and 2017, and as a subject person in 2018. As a result of observing students in 2016, it became clear that the purpose of the assignment was to develop the ability to delve into the issues of discrimination and prejudice. In order to devise a new program to meet this purpose, I examined the content and format of pre-learning, introduction of a guide to the tour, and the positioning of retrospective learning. Reflecting new content in the 2017 and 2018 classes, there was a marked change in student learning. In particular, the report of the students in 2018 took into consideration the issue of discrimination and exclusion in society as a problem related to oneself.

Keywords: issues of Hansen’s disease, symbiotic education, diversity education Christianity and Hansen’s disease
